

ルパン三世のイメージとその考察

今村 颯斗

(福永 勝也ゼミ)

イントロダクション

『ルパン三世』とはモンキー・パンチ氏のマンガである。1967年に双葉社の『漫画アクション』8月10日号(創刊号)で連載された。

その4年後の1971年からはテレビアニメ『ルパン三世 第1シリーズ』の放送がなされた。さらに、6年後の1977年にはテレビアニメ『ルパン三世 第2シリーズ』の放送開始。1978年に公開され、吉川惣司氏が監督した劇場版第1作目の『ルパン三世 ルパン三世 vs 複製人間』が公開された。翌年の1979年には「スタジオジブリ」で世界的に有名な宮崎駿氏の初監督作品である劇場版第2作目『ルパン三世 カリオストロの城』が公開された。『ルパン三世 カリオストロの城』は頻りに読売テレビの長寿番組である『金曜ロードショー』で再放送されて幅広い世代に知られており、非常に人気のある作品だ。

1984年にはテレビアニメ第3シリーズの『ルパン三世 PARTIII』が放送開始された。その翌年1985年には映画製作会社「日活」で活躍していた『けんかえれじい』(1966年)『殺しの烙印』(1967年)、日本アカデミー賞を受賞した『ツイゴインルワイゼン』(1980年)から始まる『陽炎座』(1981年)『夢二』(1991年)の「大正浪漫三部作」を監督した人物として知られている鈴木清順氏が監督した劇場版第3作目の『ルパン三世 バビロンの黄金伝説』が公開された。

その後、主要キャストが交代したことによるバッシングやルパン三世役の初代声優・山田康雄氏が1995年に脳出血で死去してしまうトラブルがあったが、1989年から2013年までの24年間、テレビスペシャルが放送された。2014年には監督・北村龍平氏、主演・小栗旬氏による実写版が公開された。さらに、2015年には第3シーズンから30年ぶりのテレビアニメの第4シリーズが

制作・放送された。

ルパン三世はマンガ・アニメ・映画だけでなくゲーム・パチンコ・テレビCMなどと幅広いコンテンツを展開している。そして、約半世紀もの間多くの人に愛されている作品である。

本論では『ルパン三世』を主人公である「ルパン三世」を用いて様々な視点からルパン三世のイメージとその考察をしていきたい。

第1章では原作者・モンキー・パンチ氏を筆頭に各制作者のインタビューや発言から読み取れるルパン三世のイメージとその考察をしていく。

第2章ではルパン三世の設定から読み取れるステレオタイプや遺伝子的特徴の側面から読み取れるルパン三世のイメージとその考察をしていく。

第3章ではルパン三世の作品と実際の社会での事件や騒動を照らし合わせた上でのルパン三世のイメージとその考察をしていく。

第4章ではアンケートや神などといった大衆の心理から読み取れるルパン三世のイメージとその考察をしていく。

第1章・制作者たちから見るルパン三世

(1) 原作者 モンキー・パンチ氏から見たルパン三世

原作のモンキー・パンチ氏によると「とりあえず1〜3ヶ月ぐらい描いてみようか。読者からの反響がなかったら、次の作品に行こう。」(講談社2015年)と述べている。当初はお試しの感覚が強く長く続ける気はなかったようである。また、アニメ化の話聞いたときについての感想は「正直、アニメでこの世界観を作れるわけがない。」と思っていたそうである。当時、アニメは子供向けのものが多くルパン三世のような作品は想像もつかなかったようだ。しかし、東京ムービー(現・トムス・エンタテインメント)代表の藤岡豊氏の熱

心な説得により半年後、パイロットフィルムが完成しその出来が素晴らしくアニメ化を許したようである。アニメ化が決まってからは大隅（現おおすみ）正秋氏とルパンの話が続いていたようである。『ルパン三世』の作品イメージは『トムとジェリー』であると述べており、ルパンとそのライバルの銭形警部の追いかっけっこを描きかかったようである。また、モンキー・パンチ氏は「時代に合わせて変化し続けるのが、ルパンなんだと思う。」（講談社 2015 年）と述べている。

しかし、当初の思惑に反して作品が長期化し連載から約 30 年後の 1996 年 4 月 20 日公開に公開されモンキー・パンチ氏自身が監督した劇場版第 4 作目の『ルパン三世 DEAD OR ALIVE』の公開直前のインタビューでこう発言している。

「宮崎ファンは凄いですね。僕はインターネットをやっているけど、未だにあの人の影響は強いんですね。アメリカでもヨーロッパでも『ルパン三世』を知っている人はほとんどが『カリオストロの城』からですからね。物語の面白さもそうですが、その凄さは、僕とは違う『ルパン三世』を出した感じがします。僕の原作の場合は毒があって、女性に対する優しさはあるけれども、ああいう優しさはないんですね。わりとクール。それに対して宮崎さんは宮崎さん流のルパンを出した。ただ問題は「カリオストロの城」以後、作る人がみんな宮崎さんに引っ張られている。だからルパンが優しくなって、女の子が倒れたら手を貸して起こしてあげるようなルパンばかりで、もういい加減にしてくれと言いたくなる。」

「(カリオストロの城との) 違いを出そうというよりも、僕が原作で考えたそのままのルパンを出したい。絵コンテを見ても、本当にルパンが優しいんだよね。もういいかげんやんなっちゃうの。だからね、今回は絵コンテマンと喧嘩状態でしたよ。例えば「爆発が起きたらルパンは女性を抱いて逃げる」というシーン。こんなのはいらない、女性をほっぽりだしても自分は逃げると。そういう冷たさみたいなものをルパンはもっているのだ、と。戦うときも女の子をかばって戦うなんてしないでいい」

と発言しており、この発言から自分の考えていたルパン三世のイメージと世間が抱いているルパ

ン三世のイメージの変化に驚きを抱いていることが読み取れる。

(2) 第 1 シリーズ初期総監督 おおすみ正秋氏から見たルパン三世

次に第 1 シリーズ初期総監督のおおすみ氏によると「逃走と挫折という時代の過渡期にルパンは生まれた」（講談社 2015 年）と述べている。60 年代後半は池田勇人の所得倍増計画に日本中が乗って、世の中を変えようという左翼的な運動が行き詰まりを見せていた。新左翼にとって最後の戦い 70 年安保闘争も盛り上がり欠け、日本中に「しらけムード」が漂っていた時代。『ルパン三世』のアニメ化企画はちょうどそんな時代の間に生まれた。放送開始時には「しらけムード」の時代に入っていたと感じたようだ。1964 年、当時の新宿文化の象徴だった、紀伊國屋ホールが出来た年に東京ムービーが出来た。当時の新宿は、寺山修司・唐十郎、映画界では大島渚などの文化人がいた街だった。左翼と警察の衝突も多く、歩くと硝煙の臭いがすることも多かったそうだ。おおすみ氏は、反体制側の若者でもあり「これからの日本はどうなるんだ、俺らはどうして行けばいいんだ」と議論を戦わせる日常があったそうだ。そんな中、おおすみ氏に『ルパン三世』の話がきたとき彼が藤岡氏に出した条件は「大人のアニメ」であり大きな目玉は 3 つあった。

1 つ目は徹底した「実証主義」作品に登場する銃や、自動車などを限りなく本物に近づける努力をした。

2 つ目は「キャラクターのリラックスしたポーズを多用すること。」であり、おおすみ氏は、『ルパン三世』の前に『巨人の星』のパイロットフィルムを製作していた、『巨人の星』では、精神世界の前提である、「努力すれば道は開ける、とにかく根性だ！」みたいなドラマは、世の中的に表現を変えること話にならなくなったと、感じ『ルパン三世』では、逆に出来るだけリラックスしたポーズを多用してキャラクターを動かそうと考えたと述べている。

3 つ目はカット割りの面で「クローズアップ」と「引き」の絵を次々と切り替える技法である。映画でいう「カットアウェイ」の技法を多用した

こと。これは、2つ目の「リラックスしたポーズ→緊迫感」と同じく、画面の切り替えも視聴者を飽きさせない工夫である。

『ルパン三世』には、とにかく新しく面白そうなことを詰め込んでいった。また、テレビアニメ化の決定を受けてライターには日活のハードボイルド作家を手掛けていた大和屋竺（やまとやあつし）や宮田雪（きよし）などのライターが集まった。しかし、視聴率は芳しくなくおおすみ氏は途中で降板した。その後、再放送を繰り返すことにより人気上がり第2シリーズに繋がった。

ここから読み取れることは、おおすみ正秋氏のルパン三世のイメージは学生戦争のからくるフラストレーションの発散先として存在するルパン三世であり。そのイメージは限りなく現実的なイメージを持っていると考察できる。

(3) 『カリオストロの城』 監督 宮崎駿氏から見たルパン三世

第1シリーズの視聴率不振により宮崎駿氏はおおすみ氏と演出を交代した。視聴率低迷を受けて宮崎駿氏はこう発言した。

「旧ルパンの路線変更は、スタッフのあずかり知らぬところから強要されたものだったが、演出を入れかわるハメになったほくら（高畑勲と宮崎氏）は、まず何より「シラケ」を払拭したかった。命ぜられたのではない（中略）快活で陽気、まじめもなく貧乏人のせがれが、ルパン祖父の財産など、先代が全部使っちゃって、何も残っちゃいない。ルパンはくるくる走り回り、カナブンのようなゼニ形が追う。何百万丁も生産された、軍用拳銃（ワルサー P38）をもって、いきがったりしない。知恵と体術だけで、あくことなく目的を追うルパン。次元は気のイイ男になり、五右エ門はアナクロこっけい男になり、不二子は安っぽい色気売り物にしない。その好悪は別にして、ベント SSK に乗るルパンと、イタリアの貧乏人の車・フィアット 500 に乗る 2 人のルパンが、あのシリーズの中で対立し、せめぎあい、影響しあって、結果として活力を作品にもたらすことになった。あの時代の二つの顔を持つことで、ルパンはより時代の子どもらしくなったのだと思う。」（双葉社 1999 年）

このように、宮崎氏はおおすみ氏がルパン作る

きっかけであったシラケを否定し新しくルパンを作り直したのである。また、カリオストロの城を監督した時のルパン三世の人物設定とし作画監督の大塚康生氏との対談でこのようにも述べている。

宮崎「国籍を考えた時、ルパンっていうのは僕なんか、どう考えてもイタリア人って風にしか思えないですね。フランス人のようなエスプリ（機知）に満ちたしゃれた男じゃなく、むしろイタリア人の無骨さ。」

大塚「陽気さだね。」

宮崎「貧乏人のイタリアだよ。ナポリあたりの、能力はあるけれど泥棒しかやる気がなかったから泥棒になってしまったっていうような。そうすると車なんかも FIAT がびったりなんですよ。あれはいフランス人とイタリア人と日本人の軽薄な部分と、イタリア人の騒がしい部分がかくついていたっていうようなキャラクターだと勝手に思ってる。」

宮崎氏の独自の設定として日仏混血のみならずイタリア系も重要な要素であるとしている。シラケ世代のアンニュイなイメージをイタリア系という血で陽気さを得ようとしたのが伺える。

第 2 章・民族的特徴から見たルパン三世

(1) ステレオタイプから見たルパン三世

ルパン三世のイメージを考察していくに当たって見ていきたいのはルパン三世たちの体格や服装である。ルパン三世の身長は 179cm であり、緑・赤・ピンクなどの派手なジャケットの着用が特徴的である。仲間の次元大介は 178cm で真っ黒なダークスーツ、石川五右衛門は 180cm であり、服装・言葉遣いがステレオタイプな侍である。また、ルパンの恋人の峰不二子も 167cm であり日本人離れしたプロポーションである。ライバルの銭形警部も 181cm であり coron 警部を髣髴させるようなくたびれたコートを着て申し訳ない程度に日本のタバコである「しんせい」を吸っている。

さて、1965 年の厚生労働省の発表によるとデータでは、日本人男性の平均身長は 164.9cm である。さらに、日本人女性の場合は 153.4cm であり、ルパン三世たちは 10cm 以上も高い。その



図1 ルパン三世



図2 次元大介



図3 石川五右衛門



図4 峰不二子



図5 銭形警部

ルパン三世のイメージとその考察

約 40 年後の 2007 年での日本人男性の平均身長は 173.3cm で日本人女性の 156.5cm である。当時より約 40 年たってもルパン三世たちのほうが高い。

さらに、ルパン三世の初代声優・山田康雄氏は今では監督としても名高いクリント・イーストウッド氏公認の吹き替え声優であった。次元大介の声優・小林清志氏はジェームズ・コバーン氏の吹き替えを担当する声優である。第 1 シーズンの石川五ェ門の声を演じた大塚周夫氏はチャールズ・ブロンソン氏の担当声優である。さらに、銭形警部の初代声優の納谷悟郎氏は、チャールトン・ヘストン氏を担当した。

このように、西部劇のスターたちの吹き替えた声優が多い。ルパン三世という作品は日本人が製作しておりキャラクターたちも日本語で会話をしている。しかし、ルパン三世たちを演じている声優たちから見ると、その世界観は洋画の延長線上である。また、ルパン三世は日仏混血である。このあえて混血の設定を導入した理由として考えられるのは、日本人の純血だけで話を進めるのはリアリティがないと判断したのからではないだろうか。

また、次元大介、石川五ェ門、銭形警部、峰不二子などは混血という描写はない。しかし、基本的にルパン三世という作品は主人公であるルパン三世主導で物語は進む。それ以外の日本人はルパンのキャラクターをより際立たせるような脇役として存在している。メンバー各々が個性を持って行動しているようにみえる。しかし、それもすべてルパン三世の言動により触発された行動であると受け取れる描写も多々ある。ルパン三世という作品内での日本人の描写は「ルパン三世という人間がいなければ自分で動くことが、出来ないという」戦後日本のアメリカ重視の政治体制そのものであると同時に日本人のステレオタイプに相当することになる。

(2) 行動遺伝学から見たルパン三世

第 2 章の (1) で述べたように、ステレオタイプというのは社会的な側面での民族評価である。しかし、この評価は行動遺伝学的側面から見ても同等な見解が得られる。行動遺伝学者チャオらの調査によると(安藤寿行・2012 年)セロトニン・

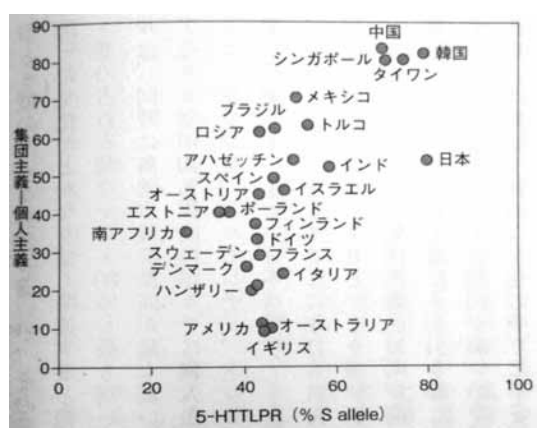


図 6 国ごとにみたセロトニン・トランスポータの遺伝子多型と個人主義との関係

表 1 日本・フランス・イタリアを抽出した表(著者作成)

国名	l 型	s 型
日本	約 50%	約 80%
フランス	約 30%	約 40%
イタリア	約 20%	約 50%

トランスポータ遺伝子(ポジティブ遺伝子)多型の l 型と s 型の占める割合の違いが、その国がどの程度「個人主義的」な文化か「集団主義的」な文化とかなり強く関連すると報告している。ルパン三世は日仏混血である。さらに、宮崎駿氏の独自の設定ではあるが第 1 章の (3) でも述べたようにイタリア系である。

図 6 と図 7 から読み取れることとして日本はフランス・イタリアに比べて集団主義的な遺伝子を多く持っているということになる。

結果として、社会学的・行動遺伝学的に見ても日本人だけの登場人物が世界を股にかけ様々な財宝を盗むという話には現実味が無くルパン三世を日仏混血やイタリア系に設定せざるを得なかったという考察が可能になる。

(3) 血から見たルパン三世

第 2 章 (2) で述べた遺伝子の考察を裏付ける重要なルパン三世の話として『ルパン三世 第 1 シーズン』の第 20 話『偽ルパンを捕まえろ!』という話がある。

この話の内容は各地で窃盗事件が多発。その手口はルパン三世そのものだが予告状には「元祖ル

パン」と書かれている。本物のルパン三世が元祖ルパンを追い、行き着いた先はとある小島。そこは何百年も前から泥棒稼業一筋のドロボウ島だった。元祖ルパンことジンペイをおってきたルパンは、仲間になりたいと語るが、地下牢へ入れられてしまう。そこから抜け出したルパンは、元祖ルパンのテクニクはすべてルパン一世（アルセーヌ・ルパン）が書いた「盗術書」に基づくものと知る。ルパン三世は持ち前の変装術で元祖ルパンを騙し盗術書を盗み出すことに成功する。

この話の解説として作家の高橋実氏は以下のよう

に述べている。日本ヒーローの原型は、『古事記』や『日本書紀』に登場するヤマトタケルに遡ることができる。彼こそ最高の〈特権〉に恵まれていることは間違いない。なぜなら、彼は神なのだから。あるいは『宇治拾遺物語』の天武天皇。彼は「現人神」の天皇のみである。折口信夫は、彼ら〈特権〉ヒーローの登場する日本最古の説話類型を“貴種流離譚”と名付けた。「神あるいは神のように尊い種姓の人が故あって漂泊し、辛苦を重ねながら流離の生活を続ける」物語。ここで〈特権〉は〈貴種〉とされる。（中略）

佐藤忠雄は「身体障害者を神秘化する日本の伝統」を述べた文章で、柳田国男の『一目小僧』の仲の仮説を引用している。

大昔、日本には、人間を神にいけにえとして捧げるといふ風習があり、捧げられる人も喜んで犠牲になろうとした。そのとき、いけにえになる人は、しばらく、逃げられないように、片眼とかたあしをつぶされたままにされていたが、本人は神に召されるつもりで無私無欲になっていたから、澄んだ心で、一種の預言者のな役割を果たし、生きながら神としてあがめられた。のち、その風習はだいに形式化し、形骸化して、じっさいには殺しもせず、片眼片足にもしなくなったであろうが、片眼片足の神という伝説だけは残った。

つまり、神として誕生した〈貴種〉は、「聖性」とイコールで結ばれるのである。以こう大衆小説は座頭市、柳生十兵衛、丹下左膳などの身体障害者ヒーローを生み出していく。（中略）だが、ここで興味深いのは、彼は〈貴〉や〈聖〉でありながら、〈卑〉や〈俗〉を帯びた両義的な存在であ

るということである。（中略）これらの物語の中で、〈貴〉や〈神〉、つまり、“権力”を持った〈特権〉ヒーローは、〈俗〉や〈卑〉である庶民＝読者に代わって悪者を懲らしめるのだ。つまり、彼らが両義性を持つのは読者＝日本人に理由が帰せられていることになる。日本人は、ただ正義が悪をうつ物語では納得できない。正義には“権力”という保障がなければ安心できないし、その“権力”には自分と同じ〈俗〉や〈卑〉の基盤がないと共感できないのだ。（高橋実 1999 年）

引用文献の中では、フランスの血が貴や聖なのか、日本人の血が俗や卑であるかは明記されていない。しかし、第2章の(2)で述べた日本人の保有するセロトニン・トランスポート遺伝子の保有量を考慮すると日本人の血が俗や卑であり、フランス人又はイタリア人の血が貴や聖である可能性が高い。そのため、彼らはアルセーヌ・ルパン（ルパン一世）の書いたとされる「盗術書」に則った行動をした。これは例えるなら『聖書』に記されている内容に即して生き方を決めるキリスト教徒に近い行為である。さらに、作中の「ドロボウ島」の外側は江戸時代のような建物であるが内側はシャンデリアなど洋風の豪華な内装となっているという点でも日本人の血が俗や卑でありフランス及びイタリアの血こそが貴や聖という考察ができる。

第3章・社会から見たルパン三世

(1) 湾岸戦争から見たルパン三世

1991年に公開されたテレビスペシャル第3弾『ルパン三世 ナポレオンの辞書を奪え』がある。

本作は湾岸戦争を題材にしている。話の内容はG7の各国首脳が集まり湾岸戦争によって崩壊した経済を立て直しの方策として、推定金額・2000億ドルと言われている「ルパン帝国の財宝（）」を探し出し財宝を経済の建て直しに利用することを決め、各国首脳達は財宝のありかを知っているルパン三世の捕獲作戦を開始するという内容である。

この作品内でのルパン三世とは湾岸戦争後の経済的混乱を「ルパン帝国の財宝」という形で救う救世主である。しかし、本人であるルパン三世はその救う術を知らず自らもその財宝を求めるとい

ルパン三世のイメージとその考察

う状況になっている。さらに、「ルパン三世を捕らえてルパン帝国の財宝の在り処を聞き出す」という共通の目的を各国首脳人が持っていた。それは各国が協力し特定の問題の解決に取り組むという理想的な民主主義が成り立っている。

『ルパン三世 ナポレオンの辞書を奪え』の中での、ルパン三世は抽象的なヒーローではなく推定金額 2000 億ドルに相当する「ルパン帝国の財宝」という物質的に救いを示す人物である。さらに、各国の経済状況を打開し救われるにはひたむきな姿勢で努力し各国が協力して「ルパン帝国の財宝」という生きる糧も与える者としても描かれているがルパン三世自身もその事実を知らず無意識に人々に対して希望を与える存在となっている。

(2) バブル崩壊から見たルパン三世

ルパン三世の歴史は半世紀と長くその間に日本では様々なことが起こった。本論でも述べたように第 1 シリーズ初期総監督であるおおすみ正秋氏のルパン三世のイメージは学生戦争からくるフラストレーションで生まれた。

この半世紀の歴史の中で日本に対して大きな絶望を与える出来事は数多くあった。そのうちの 1 つとして挙げられるのはバブル崩壊である。

バブル崩壊とは 1973 年 12 月から 1991 年 2 月まで続いた安定成長期が終わり 1991 年 3 月から 1993 年 10 月までの景気後退期に突入し、その後は「失われた 20 年」と呼ばれる景気低迷期に突入した。

そのバブル崩壊直後に放送された作品は第 3 章の (1) で述べた、『ルパン三世 ナポレオンの辞書を奪え』である。この作品は湾岸戦争だけでなくバブル崩壊の側面からでも考察できる作品だ。本作のお宝は、推定金額 2000 億ドルのルパン帝国の財宝であり経済低迷における根本的な解決策は金という点においてお宝が比較的分かりやすいものとなっている。

また、本作での次元大介が劇中内の台詞として「組織や国に忠誠誓ってなんになるんだ？ 人生楽しめよ。」と『ルパン三世 ナポレオンの辞書を奪え』でのゲストヒロインである日本人の国家保安局の諜報員の女性に対して発言している。これはバブル崩壊による大幅なリストラで行き場を

失った人たちに対しての励ましの言葉と取れるような発言であるように見える。

さらに、翌年の 1992 年の作品であるテレビスペシャル第 4 弾『ルパン三世 ロシアより愛をこめて』がある。この作品でのお宝はロマノフ王朝の金塊という単純明快な財宝である。やはりお宝から考察するとバブル崩壊の傷跡が残っているような状況である。さらに、翌年の 1993 年の作品であるテレビスペシャル第 5 弾『ルパン三世 ルパン暗殺指令』での財宝は世界最大手の武器密輸会社の売上という金塊やルパン帝国の財宝以上に現実的なものとなっている。バブル崩壊以降のルパン三世の財宝はそれまでの財宝に比べて遥かに現実的になり経済状況の悪化による作品の変化が伺える。さらに、ルパン三世が敵である武器密輸会社から盗みの依頼を受ける理由としてルパン三世自身にクレジットカードの負債が多額にあり自己破産寸前で貧困に喘いでいるという描写がある。3 作品連続でお宝が現実的である背景から読み取れることはバブル崩壊による影響は相当深刻なものであると物語っている。

(3) 宗教団体によるテロ行為から見たルパン三世

1995 年 4 月 22 日に公開された劇場版第 4 弾『ルパン三世 くたばれ！ノストラダムス』がある。

本作は宗教団体によるテロ行為を題材にした作品である。

その内容としてミッシェル・ド・ノストラダムスの預言書に基づいて犯罪を行うノストラダムス教団という新興宗教団体がいた。その指導者は「世界の滅亡は近く、その大災難から逃れるにはこの手にある“失われた予言書”に従うしかない！」と訴える。一方、盗みを終えたルパン一味は旅客機の中にいたがそこで教団が引き起こしたハイジャックに巻き込まれてしまう。かろうじて脱出することにルパン三世は成功した。だが、その際に教団はある少女を誘拐する。不二子の話によるとその少女はアトランタの巨大財閥の 1 人娘であった。その財閥は「失われた予言書」を高さ 1000m のビル「アースビル」の最上階に保有しておりノストラダムス教団はそれを狙っていた。そこで、ノストラダムス教団はアースビルの崩壊

を予言しアースビルを爆破しルパン三世達はノストラダムス教団と戦うという内容である。

この映画の公開直前の1995年3月20日、宗教団体「オウム真理教」が「地下鉄サリン事件」を引き起こす。公開自体は「地下鉄サリン事件」を意識したわけではない。しかし、最終的に事件の後の公開という結果になった。

「オウム真理教」と映画内での「ノストラダムス教団」の共通点として。信者の洗脳の際に科学技術を用いているところがある。映画ではミサングの形をした洗脳装置を利用し洗脳していた。一方「オウム真理教」では「PSI (Perfect Salvation Initiation 完全救済イニシエーション)」と呼ばれるヘッドギアの形をした洗脳装置を用いた。この装置は教団の説明によると「ヘッドギアには電極が付いており、麻原彰晃氏の脳波を再現した吸うボルトの電流を流すことで、麻原の脳波と自分の脳波を同調させる。」というものである。実際の効果はあるわけではないが装置としては似たものを利用している。さらに、教団の教祖の末路も似たように描写されていた。映画内での黒幕「ノストラダムス教団」の教祖・ライズリーの最期は黄金の振り子にしがみ付き転落死であった。一方、麻原彰晃（松本智津夫）氏は山梨県西八代郡上九一色村の「第6サティアン」の隠し部屋で現金960万円の札束を抱えているところを発見され逮捕された。そして、2006年9月15日に最高裁で麻原彰晃（松本智津夫）氏の死刑判決が確定した。麻原彰晃氏自身は死んではいないが末路は似たようなものである。

さらに、この映画の公開の6年後、アメリカの世界貿易センタービルでイスラム系テロリスト集団「アルカイダ」による「9.11事件」が引き起こされる。オウム真理教事件と同じように宗教団体によるテロ行為である。この事件をきっかけにイラク戦争が勃発した。さらに、EU圏を中心とした世界各地でテロが発生しその行為によって多くの命が奪われている。

映画内の「アースビル」とアメリカの「世界貿易センタービル」この2つのビルは宗教団体によるテロ行為で倒壊する。映画内では明確な死者は出ていない。しかし、倒壊したビル周辺はまさしく地獄絵図であった。

ここでも、ルパン三世は泥棒という犯罪者であるにも関わらず、宗教団体によるテロ行為から世界を守った救世主のような活躍をした。

(4) リーマンショック・政権交代から見た ルパン三世

第3章の(2)で述べたバブル崩壊に匹敵するぐらいの日本の危機として挙げられるのは、2008年9月15日に起こったリーマンショックやその後起こった政権交代である。その前後に放送された作品は、2008年4月2日に発売されたOVA（オリジナル・ビデオ・アニメーション）『ルパン三世 GREEN VS RED』である。

『ルパン三世 GREEN VS RED』で題材にしているテーマはルパン三世とは何者なのか？という内容である。当時、日本ではリーマンブラザーズの倒産によって世界同時恐慌とその影響による就職氷河期が発生していた。失業者や学生たちは就職活動をしてしても不採用、通称「お祈りメール」による自分の存在が否定されているような仕打ちが頻繁に起こった。就職活動及び面接の時に必要なこととして自己分析・自己PRといった自分を客観的に見る必要性が出てきた。また、本作の主人公であるルパン三世の真似をする主人公「ヤソオ」はルパン三世になる前はラーメン屋でバイトしているフリーターであった。さらに、作中の冒頭のシーンでは求人雑誌を読んでいるという求職者的な描写もあった。以上のことから『ルパン三世 GREEN VS RED』で読み取れることは、リーマンショックはルパン三世といった強烈なアイデンティティをもったキャラクターでもその存在意義が分からなくなるほどつらい状況であったと考察できる。

さらに、その1年後に放送された『ルパン三世 VS 名探偵コナン』という作品がある。

『名探偵コナン』とは週刊少年サンデーで1995年から連載している人気少年マンガである。この作品は一見ただの人気漫画『名探偵コナン』とのコラボレーション作品のように見える。しかし、放送日に着目するとこのような考察ができる。放送日は2009年3月27日である。この時期はリーマンショックと政権交代が起きており社会が混乱している状況であった。

その世相を反映しているような描写として、ルパン三世と次元大介は劇中飛び交う銃弾の中でこのようなセリフを発言した。

ルパン三世「派遣社員がんばれよ」

次元大介「不景気なんかじゃ負けねえぞ」

この発言は『ルパン三世 ナポレオンの辞書を奪え』の時と同じように日本人に対しての言葉である。これは不景気で苦しんでいる日本人に対して励ましの言葉と受け取ってもいいのではないだろうか。失業や就職活動はつらく厳しいと思うがルパン三世たちと共に頑張っていこうという意図が読み取れる。さらに、両作品のお宝は『ルパン三世 GREEN VS RED』では「核」『ルパン三世 VS 名探偵コナン』では「ステルス」というように軍事的な財宝である。これはバブル崩壊後に描かれた作品とは違い世界及び日本で発生している問題は金では解決できない絶望的なところまで来ているという悲観的なことが作品内での財宝から考察することができた。

第4章・大衆から見たルパン三世

(1) バイクに乗るルパン三世

2010年7月24日 ウクライナ・セバストポリで開催されたバイク愛好家のイベントに、同国を訪問中だったロシアのウラジーミル・プーチン首相（当時）がハーレー・ダビッドソンにまたがって登場した。

プーチン首相は集まった7000人のバイカーたちを「兄弟たち」と呼び「バイクは自由の象徴だ」とスピーチした。

2013年4月12日 大手オートバイ買取専門店「バイク王」とのタイアップでルパン三世たちがバイクにまたがり荒野を駆け巡るCMが公開された。

このバイク王のCMにルパン三世たちが広告塔として採用された理由として考えられるアンケートがある。

そのアンケートはバイクメーカーのヤマハによる調査である。

アンケート内容は、20～30代の女性600人を対象としたバイクに関するアンケート調査である。その調査結果として半数以上がバイクに対して憧



図7 バイクにまたがるプーチン大統領



図8 バイクにまたがる等身大の峰不二子の人形

れを抱いていると回答した。バイクに憧れる理由として「カッコイイから」や「女性が運転する姿に憧れ」などが挙げられた。

プーチン氏の発言とバイクメーカー「ヤマハ」のアンケートから読み取れることは男性だけでなく20～30代女性たちの多くもバイクに対して抱いているイメージは「自由」「かっこいい」「憧れ」などである。その広告塔になるルパン三世たちはかっこよさを体現している存在であるといっても過言ではない。さらに、ルパン三世の仲間である峰不二子はルパン三世の作品内でもピンクのハーレーを乗り回している。また、彼女のスタイルは20～30代女性たちの憧れの象徴と読み取ることが可能になる。ここからルパン三世及び峰不二子を筆頭としたルパン三世の仲間たちは「かっこいい」や「憧れ」の象徴として広告塔に用いられたと述べることができる。

(2) 神と呼ばれるルパン三世



図9 マモーの本体

ここまで述べてきて分かるようにルパン三世はただの泥棒ではない。作品にもよるが、宮崎駿氏が監督した劇場版2作目の『ルパン三世 カリオストロの城』以降悪役を倒す正義の味方という傾向が非常に強くなった。しかし、正義の味方というよりもルパン三世には「救世主」「神」のような側面もみられた。

ルパン三世を神と明確述べた作品として1978年12月16日に公開された、劇場版第1作目の『ルパン三世 ルパン三世 vs 複製人間』がある。

この作品の敵である「マモー」は1万年前から自己を複製し続けてきた複製人(クローン)であり永遠の命を得た「神」だと自称する。作品内でも超能力などを駆使してルパン三世達を苦しめた。また、彼の正体は図9のように培養カプセルに浮かぶ巨大な脳髓であり数多くいるルパン三世の敵の中でも最も異形な敵である。これは、神と言っても過言で無いキャラクターである。劇中、マモーはルパン三世を捕らえ彼の潜在意識を探った。その時、マモーはルパン三世の潜在意識を見たときこう発言した。「なんとということだッ! ルパンは夢を見ないっ!(中略)あるいは“神の意識”ほかならない!!」

この発言から読み取れることは、ルパン三世は泥棒ではなく救世主や神であるといえる。それは『ルパン三世 ルパン三世 vs 複製人間』の世界観の話だけではない。現実起こったことを題材にしている作品の多いルパン三世では、我々にとっても救世主や神といえる。

最後に

現在、アニメは大量消費の時代である。クールジャパンの推進も相俟ってか、2011年度は1年間で220作品作成されその中で新作は164本/継続56本である。さらに、2012年4月までの放送された国産テレビアニメは合計3013作品もある。その原作に相当するマンガやライトノベルやアニメ化されていないマンガ・ライトノベルなどを合わせるとその数はさらに膨大なものになる。そのような数多くあるマンガ・ライトノベル・アニメ作品の中でもルパン三世は時代遅れになることなく柔軟に社会の世相をアニメ反映した作品を公開してきている。その結果、ルパン三世は半世紀という長い間多くの人々に愛されてきてきたのである。これは間違いなく数多くあるマンガ・ライトノベル・映画・アニメ・小説の作品の登場人物の中でもそう多くはいない魅力的なキャラクターであるといえよう。その意味することは何かというとルパン三世に出てくるキャラクターたちのイメージは我々に明日を生きる希望と勇気を与えてくれる憧れの存在である。そして、どんなつらいことが起こってもルパン三世というキャラクターとして輝き続ける。さらに、我々と共に困難を乗り越えていくルパン三世のイメージ像が読み取れる。

最後にルパン三世の生みの親であるモンキー・パンチ氏の発言である「時代に合わせて変化し続けるのが、ルパンなんだと思う。」(講談社2015年)の言葉で締めさせてもらおう。

引用・参考文献

- 安藤寿康 2012年 遺伝子の不都合な事実・全ての能力は遺伝である ちくま新書 190p-192p
- 高橋実 1994年 ルパン三世 ザ・ファースト TVシリーズ まほろしのルパン帝国 フィルムアート社 207p 244p 245p
- 2015年 ルパン三世 DVDコレクション VOL.1 講談社 24p
- 2015年 ルパン三世 DVDコレクション VOL.6 講談社 20p
- 1999年 ルパン三世 カリオストロの城 InWonderLand 双葉社 68p-69p

ルパン三世のイメージとその考察

<http://www.damebito.com/lupin/lupin01.html>
<http://dearbooks.cafe.coocan.jp/rekishi05.html>
<http://arena8order.seesaa.net/article/396156099.html>
<http://www.afpbb.com/articles/-/2742719?pid=6005762>
<http://news.bikebros.co.jp/topics/news20150729-04-2/>
<http://gigazine.net/news/20121003-tv-animation-history/>

参考画像

http://www.lupin-3rd.net/lupin_world/#!#lupin
安藤寿康『遺伝子の不都合な事実・全ての能力は
遺伝である』ちくま新書 192p
<http://www.afpbb.com/articles/-/2742719?pid=6005861>
<http://www.hotbikejapan.com/mydiarys/myd-117/>
<https://middle-edge.jp/articles/aHEQK?page=3>